
絢爛舞踏 (けんらん ぶとう)

A K T D

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けんらんぶどう
絢爛舞踏

【Nコード】

N2610T

【作者名】

AKTD

【あらすじ】

新たな兵器である人型兵器が現れ、世界は大きく変わり、第4次世界大戦が始まった、そんな中、愛する者を、中国の特殊部隊にさらわれ、日本との交渉の為の人質とされた拳句、殺された1人の少年がいた、彼は何も変わらないと分かっていたながら、自分を止められず、人型兵器のパイロットとなり、中国を滅ぼすことで複製をしようと決意した。

そんな少年のバッドエンドしか存在しないと思われる、とても悲しい物語……さあその1ページ目を開こう……。

伝説のプロローグ（前書き）

えー初めまして、AKTDと申します。

今回、初投稿となりますので、至らない点も多数あるとおもいますが、ぜひとも暖かい目で見てくださいと、とても嬉しく思います。

出来れば、今後のためにもアドバイスをありましたら、どうぞよろしく願います。

それでは、ごゆるりとお楽しみください。

伝説のプロローグ

この物語の時代は西暦2204年から始まる。

この時代では石油や石炭などのあらゆる資源が枯渇していて、人間はその残り少ない資源を求めて、戦争を繰り返している。

そして今は第4次世界大戦中であり、どの国も少ない資源を有効活用するためにある兵器を主力としている。

ある兵器とは、人型兵器である。

高さ約20メートルほどの巨大な兵器だ。

しかしこの人型兵器の性能はとても低い、装甲は戦車のほうが厚いし機動力も装甲車とあまり変わりはない、使える武装もバランスが悪いからあまり高火力の物は使えない、などデータ上では、予算の無駄だと、どの国もそう言うて実用化はしていなかった、しかし、それはある時を境に一転する。

第3次世界大戦の時に、人型兵器を使用した唯一の国があった、そう日本だ。

当初、それをどこの国も脅威とは感じていなかった、むしろ日本は愚かな国だと世界は日本を笑い物にしていた、だがその余裕は1週間と持ちはしなかった、人型兵器適正SSの人物がたった1機でロシアに行き、たった1機で敵部隊を壊滅にまで追いやった結果、ロシアは自分達の国ごと核を使って焼き去り、その人物は亡くなった。

その人物は後にこう呼ばれる「絢爛舞踏」死を招く舞踏とも呼ばれたりした。

そしてロシア兵の中で運良く生き残ったものはこう言っていた。

「アレは、ひっ人では無い、ばっば化け物だ！、あれは当たり前のように人を殺す、俺達が息を吸うのが当たり前のように、アイツは息をするように人を殺す・・・しかもやつはただの1度も戦つてなどいなかった・・・踊ってやがったんだ！ただ舞っていた・・・」

それだけでどんどん人が死んでいき、部隊は壊滅した」

このロシア兵はこのような謎の言葉を残した次の日に自殺した。

世界は驚いた。

「ロシアは1、2を争う強国だぞ！何故極東の島国に・・・しかもたった1機にやられた！」

「それが分かったら苦労はしない！今分かるのは日本を今までのように無視できなくなったということだ！！」

「日本は直ちに潰しておくのが懸命でしょうね」

「そうと決まればわが国はすぐに日本を攻める、人型兵器がなんだ！圧倒的質量で踏み潰してくれるわぁ」

そう言ったのは中国代表だ。

「ふむ・・・私も中国代表に賛成いたしましょう」

「私もだ」

「私もだ」

と口々に手が上がって行く。

「それでは、10日後の明朝3時に侵攻を開始いたしましょう」

その意見に、どこの国も反対はしなかった。

しかしそれから数日後、その考えは甘かったと、世界が痛感する。世界各国の主要都市に人型兵器が攻撃を仕掛けたのだ。

「絢爛舞踏」のような強さを持つものは現れなかったが、世界に送られた者達はほぼ全員が、人型兵器適正がAまたはSの者である。

しかし、現存する兵器がまともに通用するわけも無く、世界は瞬く間に壊滅させられ、第3次世界大戦は幕を閉じた。

そして時は流れ、今は第4次世界大戦中である。

あれからどこの国も破壊した僅かな、人型兵器を解析し、今ではどの国も人型兵器を使用している、しかしその性能は所詮第3次世界大戦中のものだ、日本はそれを凌駕するようなものをとくに作り出している。

その技術力を脅威に感じ、日本と同盟を組んだ国は行くつかある。

そして、その日本に、とある少年がいた、少年に名は無い、少年は心に深い傷を負い、人型兵器のパイロットとなった。

彼は、愛する者を中国の特殊部隊に連れ去られ、中国は人質を使い日本と交渉した、その内容は簡単なものだ。

「人型兵器の全データと、機体のサンプルをよこせ」

しかし、当たり前前の如く日本はそれを断り、人質を見捨てた。

だからと言って、少年は日本政府を恨んだりはしなかった、しようがないことだ、そんな兵器のデータをたかが数十人の人質で渡すことはどこの国もしないだろう。

そういったことから少年はパイロットとなった、しかし適正はA、よくも悪くも無いといったところだ、だが少年は愛する者を殺されたことの怨みを中国を滅ぼすことで晴らそうとしている、少年は複製をして、愛するものは喜ばないと理解はしている、しかし理解していても体が止まらない、頭では何の解決にもならない、新たな憎しみを増やすだけだと分かっている、だが人間は理屈だけで物事を決められるほど優れてはいない。

これはそんな少年の、悲しい・悲しい・・・物語。

伝説のプロローグ（後書き）

えー大1話をお読み下さり、真にありがとうございます。
それとここに物語の細かい説明を少し。

人型兵器はこの物語では戦車と呼ばれています（現存していた戦車は旧型戦車と呼ばれている）

何を動力として動いているかは秘密で、国のお偉いさん方しか知りません、まあエネルギーが尽きることは無いと思って下さい。

適正はC、B、A、S、SSの5段階です。

主人公の名前は途中で出ます（結構後のほう）

ヒロインも後のほうで、出てきますが、あまり期待しないように、あくまで主人公の複製劇です。

他の設定などは順次出していきます。

それでは

少年の毎日（前書き）

この人型兵器の外見はガンダムのような角ばった感じでは無く、
アーマード・OアのACやガンパレーO・マーチの土魂号のような
丸みを帯びた感じの形をしています。

ちなみに日本と同盟を結んだ国は、アメリカ、ドイツ、フランス、
イギリス、等である。（ロシアは無くなり今は中国とアメリカが奪
いあっているような形になっている）

少年の毎日

ここは戦車（人型兵器）の整備室兼保管室である。

戦車といつても初期の物とは性能が圧倒的に勝っている、前は武器や予備弾装を戦場まで持って行ったのだが、技術が進んだおかげで戦車と倉庫を特殊なネットワークで繋ぎ、倉庫内の武器をテレポ―トさせることが可能になった、そのおかげもあり前より武器の種類も豊富になったのだ。

そんな倉庫の一角で少年は各武装の数と品質のチェック及び戦車の期待チェックを行っていた。

「よっ少年」

そんな少年に声をかける人物がいた、彼の名は剛何故か名前しか名乗らず名簿にも苗字は載っていない。

しかし彼は少年が心を許す数少ない人間の内の一人だった。

「何か用か？」

「いや、ちょっと一緒にシミュレート訓練をしないかなって思っ
ね」

「おう、分かった今行くから少し待っていてくれ」

少年はそう言い、2階の作業場から急いで降りてきた。

「待たせたな、それじゃ行こうか」

シミュレート訓練とは、その名の通り、シミュレートマシンを使って練習をするもので、かなり実践に近い訓練が出来るという代物だ、しかしサイズもそれなりに大きく、値段も張るのでこの基地には2つしか配備されていない。

「よしそれじゃあ訓練を始めるが設定はいつも道理の適正Bの機体30機でいいかな？」

「オーケイ」

何故適正Bにするのかと言うと、適正Cの機体は戦闘では全く役に立たないので基本的に物資の運搬として使われるのだ。

だから戦闘に出ている時点で適正はB以上と言つことになる。
そしてシミュレートマシンは機動した。

(場所の設定は東京、視界は雨によつて見えずらく、敵30機に
対しこちらは1機のみか・・・相変わらず無茶なせつていだな。)

(敵の居場所がよくわからねえからここはいったんビルに隠れて
敵が来るまで待つか。)

そう思ったとき隠れていたビルが急に破壊された。

(くっそ、いきなりバズーカかよ)

急いで脚部と背部のブースターを使い、その場からすべるように
逃げたのもつかの間、すぐに第2射と第3射が来た。

(今回の設定本当にBか?!)

そう思いながらも急いで武器を転送した。

戦車の右腕にはマシンガンがそして背中に補助ブースターが転送
されている。

(ひとまず距離をとるか)

急いで後ろに後退し、完全に見えなくなるまで下がったあと、狙
撃に適切な場所を見つけそこに身を潜めた。

(30機相手に真っ向からはさすがに無理だ、ここは確実に1機
ずつ落とすか)

そうして今度は巨大なスナイパーライフルが転送された。スナイ
パーライフルには熱感知機能があるので視界が悪くても狙えるのだ。

(距離は・・・およそ3キロ、風は少ない・・・いけるな)

ダアアアア

射撃音と共に弾丸は飛んでいき、敵のコックピットを貫いた。

ダンドンダンドンダアアアア

続けて5発打ち込みどれもあいてのコックピットを貫いた

(残り24機・・・)

スナイパーライフルはしまい右手にマシンガン左手にショットガ

ンを持って、これが示す意味は、高速型短期決戦でしとめるという意味だ。

(まずは敵に接近して、強襲だ)

そしてビルを盾にしながら接近してマシンガンとショットガンを乱射した。

(残り20機)

戦車はもともと耐久力が極端に低いので、コックピットを破壊するのもそんなに苦労はしないのだ。

すかさず敵からも反撃が来るのだが、補助ブースターのおかげで敵が撃つ頃には、射程から外れている。

その後も同じ戦法で敵を倒したのだが最後の1機は他の機体と圧倒的に動きが違う。

(剛のやろう1機だけAにしたな、まあだけどやるしかねえか) ランクが違うからこそ、ここまで圧倒できていたのだが、同じランクだとしてうぶは分からない。

(もう1度突撃だ)

そう思い、敵に向かって銃を乱射しながら突っ込んだのだが、建物の影に隠れられて、弾は全くあたっていない。

(ちいっ・・・)

小さく舌打ちをしながら敵の横を通り抜けようとした次の瞬間!

機体が真後ろに飛ばされると同時に目の前に「GAME OVER」の文字が浮かんだ。

(はあ?!)

最後の所を記録された映像で見ると、敵は手のひらから出すタイプの刺突ブレードを使い、横をとおりぬけるタイミングにあわせ、殴られていた。

「マジかよ・・・」

中国を滅ぼすのが目的なのに未だAランク相手だと勝つか負けるか分からないという自分の不甲斐なさを悔いる・・・これも少年の毎日だある。

少年の毎日（後書き）

えーはいこれはまだプロローグです。

次回辺りから本編に入っていくのと、もう少し1話当たりを減らそうかと思案中です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2610t/>

絢爛舞踏（けんらん ぶとう）

2011年10月9日02時43分発行